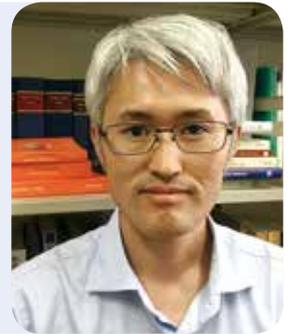


ヘルマン・コーエンとその後継者たち —無限判断の観点から—

長野県立大学 グローバルマネジメント学部 准教授

馬場 智一

〔お問い合わせ先〕 E-MAIL : baba.tomokazu@u-nagano.ac.jp



研究の背景

カント哲学の認識論的な解釈を推進した新カント主義マールブルク学派の主導者、ヘルマン・コーエン (Hermann Cohen, 1842-1918) は、20世紀初頭のドイツで（さらには日本でも）大きな影響力をもっていたが、世紀の後半にはほとんど忘れられていました。しかし、今年没後100年を迎え、その思想への関心が内外を問わず高まっています。とはいえ、後継哲学者への影響、科学認識論と晩年の宗教哲学との関連、その思想的営為の歴史的文脈と今日的意義は、まだ十分に解明されたとは言えません。

研究の成果

コーエン以後のユダヤ系哲学者であるエマニュエル・レヴィナス (1906-1995) は、西洋哲学の歴史を厳しく非難しました。その哲学史観の形成には、彼の年長の友人であるジャコブ・ゴルディーンが寄与しています。中世ユダヤ哲学を専門とするゴルディーンは、コーエンの無限判断の論理を研究し、これがユダヤ哲学の軸になると主張しましたが、長らく歴史に埋もれていました。本研究では、コーエンの無限判断の思想がゴルディーンを経由してレヴィナスにも受け継がれていることを明らかにしました（「全体性の彼方へーコーエン、ゴルディーン、レヴィナス」『京都ユダヤ思想研究』2016年。写真1）。

これまでコーエンの認識論は、晩年の宗教哲学とは強い関係を持たないと言われてきましたが、ゴルディーンの視点はコーエン哲学を一貫して読み解く可能性を示唆しています。ゴルディーンの所論に対して、近年では内外で関心が高まっており、過去の拙論（《L'actualité de Maïmonide chez Jacob Gordin》『人文・自然研究』2011年ほか）への言及も時折見られます（写真2）。

また、無限判断の哲学の先駆者であり中世ユダヤ教最大の哲学者マイモニデスに、倫理性を見いだそうとするコーエンの解釈は、20世紀初頭のドイツ・ユダヤ人共

同体の問題意識を反映するものでもありました。これについては、2017年12月に行われた京都ユダヤ思想学会で発表しました（「コーエンのマイモニデス解釈とその余波」『京都ユダヤ思想』2019年掲載予定）。

今後の展望

無限判断という観点から読み解くことで、科学認識論と宗教哲学の内的な連関の把握、コーエンとその後継者らの哲学の関連性と今日的意義の明確化が期待されます。内外の研究者とも協力しながら、特に今後は、無限判断の思想が宗教と社会、徳の問題に対してどのような意義を持つのかを検討してゆく予定です。

関連する科研費

- 2010-2012年度 特別研究員奨励費「〈同〉の哲学史の誕生：レヴィナス哲学史観の発生論的研究」
- 2013-2014年度 研究活動スタート支援「ユダヤ哲学の論理としての無限判断とその現代的展開」
- 2015-2016年度 若手研究(B)「ヘルマン・コーエンにおける無限判断とその現代的意義」
- 2017-2019年度 基盤研究(C)「ヘルマン・コーエンを中心としたユダヤ系哲学者における宗教と倫理」



写真1 『京都ユダヤ思想』（2016） 写真2 拙論に言及した論文・著作